

鬼子母神の物語



平成26年度 第11回「心といのちの講座」
仏教とこころの深層～物語の心理臨床的意味～
 2014年11月18日(土)
 淑徳大学名誉教授 金子 保

「鬼子母神の物語」の柱立て

1. はじめに
 思い出される「鬼子母大善神」の石柱、『国語辞典』で調べる、他
2. 研究資料
 「鬼子母神物語」『仏教説話文学全集1』1975隆文社、273～90頁
3. 「鬼子母神物語」の概要
 鬼子母の誕生、異変、結婚、王舎城の災厄、釈尊介入、他
4. 考察
 物語の構成、青鬼の性格、母性の発達、鬼子母コンプレックス、他
5. むすび

思い出される「鬼子母大善神」の石柱

- 東京町田の日蓮宗法要山浄雲寺(住職・室矢教新上人)の山門脇に、昭和の時代までは「安産子育て/鬼子母大善神安置」の石柱があった。現在、石柱は破損し、平成大改修の際、本堂の「鬼子母神像」の縁の下に埋めたと聞いている。
- 「鬼」の字の「ノ」が省かれていて、不思議に思った記憶がある。



国語辞典で「鬼子母神」を調べる

- きしもじん【鬼子母神】仏法を守護し、安産・育児などの願いをかなえるという女神。きしほじん。詞梨帝母。(『岩波国語辞典第6版』278頁)
- きしほ【鬼子母】鬼子母神。(梵語Hariti詞梨帝。キシモンとも)王舎城の夜叉神の娘千人(万人・五百人)の子を生んだが、他人の子を奪って食したので、仏は彼女の最愛の末子愛奴を隠し、これを戒めた。求原・安産・育児などの祈願を叶えるという。端麗にして宝衣・璽路をつけ、一卵を懐にし、吉祥果(さくろ)を持つ。歓喜母、詞梨帝母(かぎりいも)。(『広辞苑』第二版増補版五二八頁)



鬼子母神十羅刹女像 長谷川等伯筆

鬼子母神のとなり配偶神として半支迦大将が立ちその下方には五段に十羅刹女がならぶ。法華経陀羅尼品では十羅刹女らが鬼子母神とともに仏前において法華経信仰者を守護すると誓う。(2003 東京国立博物館 大日蓮展)



図書館で「鬼子母神」を調べる

- 「梵名を詞梨底Haritiといひ、譯して歓喜母、愛子母または青色鬼、鬼子母というてゐる。」→青鬼
- 「もとは儿女を噉らうほどの悪女であったが、今は佛法守護の善神として、佛出家弟子等の住する處に至り。」→噉らう=喰らう/食らう
- 「儿女を守ることを以て本務とするなり。」(以上、『昭和新纂國譯大蔵經』の「解説部第一巻」)

Case study は、case story である。

- 河合隼雄は、「ケーススタディというのは、ほんとはケースストーリーではないか」(『物語と人間の科学』岩波書店)と書いている。当初、クライアントは途方に暮れ、茫然自失、やがてカウンセリングの進行につれて「自己の物語」が話せるようになる。
- 子どもは、物語を喜び、感動しやすい。子ども時代の感動の体験は、人格の深層部分に取り込まれて、大人になっても想起されやすい。しかも、物語は、人格の深層部分に届きやすい。



鬼子母神の物語



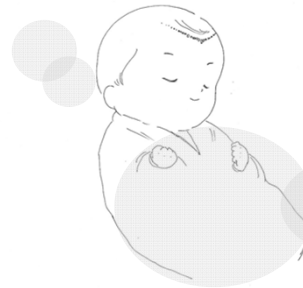
二鬼神の因縁

マガダ国のサタと
ハンシカのハンシカの
因縁が
いつか知らずして一見旧知
の縁に深く交わりを結
ぶことになった。

互いに生まれる子どもを、
いっしょにつけにする約束を
固く結んで、
右と左に帰って



カンキ誕生



マガダ国のサタ夜叉夫妻
に女兒が誕生した。
誕生した赤ん坊は、自然
に歓喜の情が湧き起るほ
どに美貌で、多数の夜叉
が喜び合ったので、その
名を「カンキ(歓喜)」と名
付けた。

カンキ異変

思春期を迎えたある日、
姉のカンキ夜叉に「異
変」が生じた。

「弟よ、王舎城へ行って
城下の子どもを
掠奪して食べようと思っ
たが、どうだろう？」

弟のサタセン夜叉に掠
奪殺害の計画を打ち明
けたのである。



姉の悪心をねんごろにさ
し、いましめるサタセン。

「姉よ、あなたは気でも狂っ
たのですか？」

見れば、角が生えて、立派
な女夜叉の姿となっている。


カンキとハンシカ



結婚した二人が、庭園を歩いで
いるとき、「わたしの生国の王舎城
へ帰って、城下の子どもを殺して
食べようと思います」と、新婦カン
キはハンシカに打ち明ける。

「そのようなことを、かりそめにも、
いうものではありません」と、
新郎ハンシカはたしなめた。

「カンキボ」と呼ばれる



カンキとハンシカは仲睦まじく、歓喜夜叉は499人の子どもの母となり、「カンキボ（歓喜母）」とよばれた。500人目の子どもが生まれた時、その名前を「アイジ（愛児）」と名付けた。

王舎城の災厄

私の子どもを返してえ！

子どもがさらわれた！

四方の城門を固く閉じよ！悪鬼から子どもを守れ！

死体も見つからない！



歓喜母ではない鬼子母だ！


私の子どもを返してえ！

王舎城の守護神が人々の夢に現れて、「お前たちの子どもは、みな、夜叉鬼子母に食い殺されたのである。」と告げた。

「おまえたちがこの災厄を除こうと願うなら、お釈迦様のところへ行って懇願するがよい。」

カンキボ？ 違う、鬼子母だ！

死体も見つからない！



釈尊に懇願する

一同は、夢のお告げに従い、竹林精舎の釈尊のもとに向き、わが子の鬼子母夜叉による掠奪殺害事件についてこの苦悩を無くしてくれるように必死になって懇願した。すると、意外なことに釈尊は彼らの哀願を受諾せられたのである。



釈尊介入

何と、なんと釈尊は、単身で鬼子母夜叉の棲家に向いたのだ。鬼子母夜叉は留守であった。


釈尊は、鬼子母夜叉の500番目の末っ子の可愛い盛りアイジを、遊んでいた二人の兄弟の目の前で、鉢に隠し、連れ去ったのである。



アイジ搜索

「アイジよ、アイジよ」と大声で泣き叫びながら、村々を捜し歩き、四方の山々、海に至るまで探し求めたが、アイジの行方は知れない。死体を見つけ出すこともできない。

探しつかれ、悩みつかれ、鬼子母夜叉は髪をかぶって裸のまま地上を転げるように、肘や膝で歩いては休み、休んではまた起きて、いざり歩き、ついに、天界の帝釈天王の善見城に辿り着いた。



多聞將軍に哀願

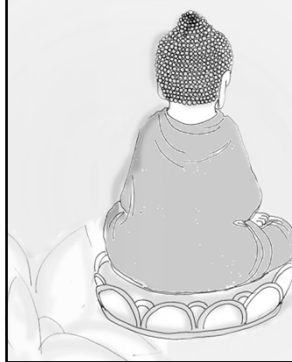
鬼子母夜叉は、疲労困憊して、大石の上にとどと倒れ伏し、悲しく泣き叫びながら、多聞將軍(多聞天)に哀願した。

多聞將軍から鬼子母夜叉は、「そんなに泣き悲しまずにあなたのいえに誰が来たのか考えてみるがよい」と言われ、はっとして、「僧の喬曇摩」が来たことを思い出すのであった。喬曇摩とは、ゴータマ、釈尊のことである。



町田・浄雲寺門前の毘沙門天(多聞天)像

釈尊の教戒



遠くから「仏の姿」を見ただけで、鬼子母の心中に「たえて久しい善心」が突如として生じた。その後、釈尊の教戒が始まる。そこに仏教カウンセリングの原型を見ることができる。

鬼子母の悔悛:「何とも相済みません」

- ・「いかがでしたか?」→「世尊よ、アイジを何者かに盗まれました。どうか、お助けください。」
- ・「それは、気の毒なことだ。ところで、お前には何人の子があるのか?」→「五百人の子とございます。」
- ・「五百という大勢の子どもの中で、わずか一子を取って、そう苦惱するにも及ぶまい。」→「いくら大勢の子がいても、子はみな平等に可愛いものでございます。」
- ・「大勢の中で一子を取って、それほどお前は泣き悲しむのに、一人二人の子を持つ他人の子をなぜに盗み取って食ったのか? 子を持つ親の心は誰も同様なだ。なぜに他人の子を食ったのか?」→「何とも相済みません。悪いことをいたしました。」
- ・立場の可逆性の信仰(戸川行男『自我心理学』金子書房)

鬼子母の悔悛:心は顔に現れる

- ・「悪いことがわかったか? 愛する者と離別する苦痛を体験したであろう。」→「これもわたしの愚痴なためでございます。なにとぞ改心いたしましたから、ご教示をお願いします。」
- ・「前非を悔い改めたならば、王舎城の人々に、おそれのない徳を施すという誓約を立てて、それを実行するならば、アイジを与えようが、実行できるか?」→「お諭しのように、誓約いたしますので、どうかアイジに会わせてください。」
- ・夜叉が過を改めて善に向かった心が、顔に現れたのを看破せられた仏は、鉄の鉢の中に隠し置いたアイジを出して、夜叉に見せた。鬼子母は、喜ぶこと限りなく、仏の教戒のごとく、五戒をよく守り、城中の人々に安楽を与えることを誓った。

鬼子母の子育て

- ・悔い改めたとはいえ、500人の子どもを養うことは、並大抵のことではない。
- ・キシモは釈尊に、「わたしおよび子どもたちは、何を食べ物としたらよろしいでしょうか?」と、口調も改まって尋ねた。
- ・「食事時になったら、食盤に食べ物を盛って、おまえの名を呼ぶほどに、心配は無用である。以後、昼夜にわたり精舎の守護に励むがよい。」



釈尊の「臨床講義」:阿難が尋ねる

- ・鬼子母夜叉変貌の「臨床場面」を目の当たりにした「仏弟子」を代表して、「阿難」が釈尊に尋ねる。
- ・釈尊による、いわば「臨床講義」が始まる。それは、「牛飼いの妻の物語」であった。事例研究(case study)のプレゼンと言えよう。
- ・牛飼いの妻の物語、それは「鬼子母神の前世譚」であった。それでは、牛飼いの妻の、時間を遡った「前世の物語」とは何を意味するものであろうか?
- ・臨床心理学の視座からは、「深層意識」の物語を意味する。仏教心理学(唯識論・大乘起信論)の「細塵」の細、それは普通の人には意識が困難な深層の物語である。

細麿：仏教心理学の深層意識

○「識」の多層構造(細：深層意識；第七識以下 麿：表層意識；第六識まで)

- 第一識、眼識(視覚一遠感覚／光、影、色、形、姿、絵、字など)
- 第二識、耳識(聴覚一遠感覚／音、響き、声、歌など)
- 第三識、鼻識(嗅覚一近感覚／匂い、香り、風など)
- 第四識、舌識(味覚一近感覚／味、毒、水など)
- 第五識、身識(皮膚・身体・深部感覚／触痛温熱寒冷、運動、平衡、内臓など)
- 第六識、意識(観念・表象・記憶／言葉・歌、概念、理念、イメージ・象徴など)
- 第七識、末那識(自我・個人的無意識—「私」の意識／喜怒哀楽など)
- 第八識、阿頼耶識(自己・集合的無意識—人類共通／精神・動物心／狂・狷)
- 第九識、阿摩羅識(生命—いのちあるもの全て／魂・植物心／氣・精・靈・芯)

「牛飼いの妻の物語」：鬼子母の深層世界



むかし、王舎城に牛飼いがいた。その妻は結婚後まもなく懐妊した。あるとき、王舎城で大設会が開催され・・・
牛飼いの妻は懐妊していることも忘れ、目をあげ、眉をあげ、手足を振って舞い踊った。臨月に近い体を急激に運動させたため墮胎してしまった。
倒れ苦しんでいる牛飼いの妻を見捨てて、500人の連中は、残酷にも王舎城の大設会に行ってしまった。

憎悪・怨恨の情が湧き起る



一人見捨てられ、路上に倒れ伏して、苦しんでいる牛飼いの妻に憎悪・怨恨の情がむくむくと湧き起る。その傍らを、たまたま果物売りが通りかかった。牛飼いの妻は、牛乳を元手にマンゴーの実500個を入手した。

牛飼いの妻の悪願

次に、牛飼いの妻は路上に威儀堂々たる覚者をみた。その覚者に、マンゴーの実500個を供養した。覚者は供養のお礼として、教法を説くべきであるのに、神通力を現して利益を与えようと考えて、「不思議な神変」をみせた。牛飼いの妻は大樹が地上に崩れ落ちるように心を奪われてしまい、「来世には王舎城に生まれ城下の子どもを皆取り殺して喰らう」という「悪願」をかけた。



恐るべき悪行の願望をおこした牛飼いの妻

牛飼いの妻は、強く、深く覚者にあこがれ、尊重するようになって、大樹が地上にどっと崩れ落ち、その身を大地にひれ伏し、「わたしはこの覚者にマンゴーの実を供養した功德によって、来世にはこの王舎城に生まれて城下の住民が生んだ子女をみな取り殺して食う」という恐ろしい悪い願をかけた。

この路上において、恐るべき悪行の願望を起こした牛飼いの妻というのが、今ここに来ている、かの詞梨底夜叉の前身である。

黒業(悪業)には悪い報いがあり、雑業には雑な報いがあり、白業(善業)には善い報いがある。ゆえに、白業を修行して、黒や雑の業をはなれねばならない。・・・と、釈尊はねんごろにさとされた。

鬼子母大善神



三井寺の鬼子母神像

鬼子母神像は、「一児を懐にし、吉祥果(ざくろ)を持ち、求児・安産・育児の女神として崇められる」(広辞苑)。

『鬼子母神物語』の結びは、「鬼神も鳴かずば討たれもしまい。・・・このように鬼神でさえも仏の心に導かれ、それを守るならば、神として後の世の人に崇められるという、ありがたい物語である」というものである。

考察1 鬼子母神物語の臨床心理学的構成

●四聖諦

1. 症状; 苦聖諦 / 概念・四苦八苦・弁えるべし
2. 診断; 苦集聖諦 / 原因・愛の渴き・断つべし
3. 病理; 苦滅聖諦 / 効果・執着を断つ・証るべし
4. 治療; 苦滅道聖諦 / 手段・八正道・修むべし
(安藤治2003『心理療法としての仏教』法蔵館)

考察1・1 症状; 苦聖諦

○苦とは何か? 四苦八苦を弁えるべし。

○クライアント(患者)は、鬼子母夜叉と、わが子を掠奪殺害された父母で、主訴は「愛別離苦」にある。不安と恐怖でパニックに陥った王舎城の人々に対して、手当てが必要であろう。

○釈尊介入による鬼子母の苦悩と、鬼子母の子ども掠奪殺害事件に起因する王舎城の人々の苦悩と、恐慌・混乱状態に陥った王舎城の収拾。

考察1・2 診断; 苦集聖諦

○査定診断→鬼子母は、アイジ捜索に疲れ果て、天上界で多聞天の見立て(=診断)によって、竹林精舎の釈尊のもとに、いわば紹介される。

○王舎城の守護神が夢に現れ、査定診断の結果(原因)が人々に告知される。人々もまた竹林精舎の釈尊のもとに紹介される。

○原因は渴愛・煩惱(貪瞋痴)にある。

考察1・3 病理; 苦滅聖諦

○鬼子母の病理は、「過去世」の「悪行願望」にある。個人的怨恨から、悪行願望が成立して、これが世代を超えて継承蓄積され、人格の最深奥の無意識世界(阿頼耶識)に内蔵される。(→鬼子母コンプレックス)

○鬼子母の「異変」をサタセンも、ハンシカも受け止められない。それは、「前世において、この邪悪の願を起こし」、「習慣性が強かったため」で、情意的な深層意識の迷いである「修惑」のためと考えられる。なお、理知的な表層意識の迷いである「見惑」は論理的思考で断ぜられる。

考察1・4 治療; 苦滅道聖諦

○釈尊介入。言わば、法的介入が実施される。

○鬼子母は、多聞天の見立てで釈尊のもとに赴き、教戒を受け、八正道を実践するとともに、謝罪・贖罪の道に入り、鬼子母大善神となる。

○王舎城の人々に対しては、佛の弟子たちが個々に相談指導にあたり、教戒を授け、城中総出で厳粛に供養が営まれたはずである。

考察2 鬼子母神(=青鬼)の性格 『泣いた赤鬼』(浜田廣介)



「心の優しい赤鬼が、村人たちと仲良く暮らしたいと思っていた。友達青鬼は、なんとか、その願いをかなえてやろうと悪者のまねをして、赤鬼に花を持たせる。」という物語です。

考察2・1 鬼子母神は「青鬼」である

・『泣いた赤鬼』の物語によれば、青鬼と赤鬼は親友である。青鬼は赤鬼の心(内部)の世界に関心がある。一方、赤鬼の願いは、人間(外部)の世界に親しむことにある。内向的な性格の青鬼は、思考に思考を重ね、悪役を申し出て、赤鬼の願いを叶える。

・鬼子母神の配偶神・半支迦大将は赤鬼として描かれている。赤鬼の性格特徴は「同調性気質」にあり、青鬼は「内閉性気質」にある。赤鬼は情動的(こころ・肚)で、青鬼は理知的(あたま・頭)である。

・赤鬼と青鬼は、それぞれ「一つの半分」である。トムとジェリー、シルベスターとトゥイーティ、アンパンマンとバイキンマン、森永太郎と松崎半三郎、・・・妻と夫、女と男、母性と父性・・・。二者の関係をユング心理学では、補償関係という。

考察2・2 頭光と身光:あたま(頭)とはら(肚)



奈良東大寺の大仏(盧遮那仏)

・解剖学者・三木茂夫は、仏像の光背に注目している。頭光(ずこう)と身光(しんこう)は、大脳と内臓に対応している。

・また、中枢神経系(大脳)と自律神経系(内臓)に対応していて、理知的な表層意識と、情動的な深層意識に対応している。

・さらに、「あたま」と「こころ」に対応していて、それぞれ「一つの半分」であるが、どちらかかといと、「こころ」が重要だといふのである。

・物語の赤鬼には青鬼の心の深層がわからない。鬼子母は心の内に思ひの及ばない赤鬼に、イライラしていたに違いない。

考察3 鬼子母の発達段階

1. 鬼子母「歓喜」の段階
2. 「異変」出現の段階
3. 鬼子母「鬼形」の段階
4. 鬼子母「善神」の段階

(金子保2004「鬼子母コンプレックス」『日本仏教社会福祉学会年報』第35号)

考察3・1 鬼子母「歓喜」の段階



・赤ん坊のケア(care)は、歓喜をもたらす。そうしたケアをもたらす機能を発達心理学ではコンピテンス(competence)という。

・後年、人に災厄をもたらす鬼子母であっても、歓喜をもたらす赤ん坊として生まれてきた点は注目すべきである。

・また、鬼子母という恐ろしい境涯を潜り抜けることで、鬼子母大善神となった点も重要であろう。

考察3・2 「異変」出現の段階

・思春期に入り、生理的異変が生じる。カンキは夜叉の娘であるから、角が生えてきたのである。しかも、王舎城の子どもを喰らいたいという欲求が自覚されるようになる。その欲求は、カンキ夜叉の心の奥底から湧き上がってきたものである。
・この事態に対し、弟夜叉も、夫夜叉も、ともにただ驚くばかりで、適切に対処できていない。異変の奇怪さに驚くばかりで、諭すのが精いっぱい。



考察3・3 鬼子母「鬼形」の段階

- ・人の子を喰らう鬼子母には、わが命に替えても惜しくない「わが子アイジ」がいた。
- ・アイジを求めてさすらう「鬼形」の鬼子母は、「母性」の肯定的側面が、非常に激しく登場してきた物語として解釈できる。
- ・咆哮する「阿形狛犬像」に対し、口を閉じた「畔形狛犬像」の姿は、母性に潜む、激しく強く執拗な「魂」(阿頼耶識)の働きである。



考察3・4 鬼子母「善神」の段階

- ・ユング心理学では、母性と父性は補償関係にあると説く。両極端の心性の統合を、自己実現(self-realization)という。
- ・鬼子母「善神」には、母性でも父性でもない「第三の道」、自己実現の仏教的意味を尙うことができる。
- ・阿部志郎師は、「弱さを抱えた強さこそ21世紀のパラダイムでなければならぬ」と説く。→長谷川良信の社会事業は「社会的母性」の具現化。
- ・グレート・マザー／地母神信仰



考察3・5 母性とは何か？

- ・ユングは、母性の表象が普遍的無意識内に人類に共通の「元型」として存在すると仮定し、これをグレート・マザー(太母)と命名した。
- ・農耕民族の地母神信仰で、「地母神は生の神であると同時に死の神である。／イザナミの神は、すべてのものを生み出す母なる神であるが、後には黄泉の国に下って、死の国をおさめる死の神となっている。」
- ・母性は肯定、否定、の両面を有している。「仏教の説話に出てくる鬼子母の話は、母性の二面性を見事に示している。はじめ、子どもを食うので恐れられていた鬼子母が、仏様の教えを受けて、子どもの守護者として訶利帝母となる。」(このような母性は「現代の女性の心の深層にも存在するものである。」)
(河合隼雄・藤田統・小嶋謙四郎『母なるもの』二玄社157、160頁)

考察4 鬼子母の「異変」の根源 鬼子母コンプレックス

「弟よ、王舎城へ行って城下の子どもを掠奪して食べようと思うのだが、どうだろうか？」
弟のサタセンに掠奪殺害計画を打ち明ける姉夜叉カンキのこころの奥底には、「牛飼いの妻の怨恨」の炎が、むくむくと噴き上がって来た。
→鬼子母コンプレックス



「あなたは気でも狂ったのですか？ そのようなことを、かりそめにも言うものではありません。」
弟サタセンと新郎ハンシカの心配、それはカンキ自身の戸惑いであり、苦惱であった。
カンキの心中には「牛飼いの妻の怨恨」の炎が、むくむくと噴き上がって来たのである。
→鬼子母コンプレックス

考察4・1 コンプレックスと日本語の「こころ」

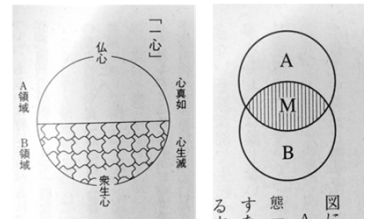
- ・コンプレックス【complex】の定義:「無意識内に存在し、何らかの感情によって結ばれている心的内容の集まりを、ユングはコンプレックスと名付けた。」(河合隼雄『ユング心理学入門』培風館68頁)
- ・こころ【心・情・意】の語源:「コル(凝)の義を強めてコ音を重ねた語ココルのルを口に転じ名詞化した語(国語の語根とその分類=大島正健)」(『日本国語大辞典 第4巻』小学館763頁)→日本の国生み神話では、日本列島はオノコロジマと呼ばれている。「海の潮が自ずと凝り固まってできた島だ」というので、この島を自凝島と申します。」(楠山正雄『日本の神話と十大昔話』講談社学術文庫)
- ・こころは、中枢神経系(大脳)ではなく、内臓系(心臓など)の働きである。無意識(深層意識)は、「頭」ではなく「肚」の働きである。

考察5 どうして鬼子母に「たえて久しき善心が突然として起こった」のか？

- ・大乘起信論では、「心真如」(A領域)と「心生滅」(B領域)との関係を「風と水の比喻」で説明する。
- ・風が「動性」であれば、水は「湿性」を意味する。水は本質的には「湿」であるが、「第二次的・偶有的様態」がある。それは「動」である。したがって、風がやむとき、水の「動相」(波浪)は消えるが、水の本性的様態である「湿相」は絶対に消えない。
- ・鬼子母の心性は本質的に善である。

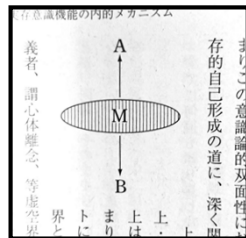
考察5・1 鬼子母の発心

- ・アリヤ識(M領域)は、二岐分離的で、双面的である。
- ・M領域からB領域に向かっでは、生滅・流転の道であって、迷妄心が渦巻く「衆生心」に至る。一転、M領域からA領域に向かっでは、向上・還滅の道であって、仏心に至る。(井筒俊彦『大乘起信論の哲学』中公文庫)



考察5・2 鬼子母の贖罪

- ・「殺された人を生き返らせる方法はない。」与えた苦しみを帳消しにする道はない。「贖罪は、過去に与えた苦痛や損害への弁償ではなく、こちら側の道徳的向上にある。」(戸川行男『意識心理学 金子書房』)
- ・MからBに向かって意味分節の構造化の道を進み、生涯のある時点で一転して、MからAに向かって進み始める。後者が悟りへの道で、「回心」とか「発心」とか言われる。
- ・井筒俊彦は、悟りはただ一回の事件ではないと書いている。「不覚から覚へ、覚から不覚へ・・・」(井筒俊彦『大乘起信論の哲学』中公文庫)



むすび 倫理とは何か？

- ・「人間にとって倫理とは何かとの問いは、多くは自己の悪の自覚から生まれるのであり、善とは避けることの至難な悪からの彼岸への憧れに由来する。」(戸川行男1981『善の心理学』思索社)
- ・「彼岸への憧れ」とは、悪の自覚に基づく「願望としての倫理的意志」(戸川行男1982『意識心理学への道』金子書房)を意味するものではないか。
- ・鬼子母神は求児・安産・子育ての祈願者を守護しようとする、無上に強い倫理的意志のシンボルではないか。

以上で、「鬼子母神の物語」をおわります。
ご清聴に感謝します(合掌)。

- 次回の「心といのちの講座」は、
2015年1月30日(金)です。
- 仏教とところの深層～物語の心理臨床的意味～
Part 2 「キサー・ゴータミー尼の物語」
- なお、『仏教心理学への道』(クオリティケア)の「X
キサー・ゴータミー尼の物語: 仏教カウンセリングの原型」(164～181頁)をご参照ください。